

伝道ブックス90

# 生も死も引き受けて

—南無阿弥陀仏のいのちに生きる—

延塚知道

## 目次

■はじめに……………	1
■「南無阿弥陀仏」の意……………	3
■私の命、仏さまのいのち……………	5
■人間の本性……………	9
■光としての教えに出会う……………	12
■仏さまの世界を見失った……………	15
■「坊さんになってくれ」……………	19
■悪いこともいいことも思い通りにならない……………	26
■お育てを受けつつも……………	31

先生との出遇い	35
地獄の本をつくっていた	37
南無阿弥陀仏のいのち——懺悔と讃嘆——	41
妻との闘病生活	48
最期までのひと時	54
「泣いてもいいよ」	58
「ごめんなさい」と「ありがとう」	64
おわりに	70
あとがき	72

【凡例】

・本文中の聖典第二版とは、東本願寺出版（真宗大谷派宗務所出版部）発行の『真宗聖典第二版』を指します。

## ■はじめに

みなさんは朝夕にお内仏ないぶつの前でお念仏をしておられるでしょうか。

代々真宗のご門徒さんは、ご本尊ほんぞんに「南無阿弥陀仏」「南無阿弥陀仏」と念仏申してこられました。この「南無阿弥陀仏」は、古代インドの「ナモー」「アマターバ」ということばが元になります。この音を漢字に当てて「南無阿弥陀仏」というのですから、漢字の意味はそれほどないと、思われます。さらにこのことばは仏語ですから、南無阿弥陀仏で私たち凡夫ぼんぷがなぜ救われるのか、その理由が分からないわけです。それらのことについて、少しずつお話しさせていただけたらと思っています。

また、実は私の妻が今年（二〇二三年）の八月の二十一日に白血病で

亡くなりまして、まだ二カ月半ほどしか経っていません。白血病になつてから一年間は病院生活をし、一応寛解かんかいして家に帰ってきて喜んでいましたが、十カ月後の今年の三月に再発しました。再発してしまうともう助からないのです。彼女の意思で、私と一緒に亡くなるまで家で半年間過ごしてきました。私も妻も南無阿弥陀仏の教えがあったから、お互いに本当にいい時間を過ごさせて頂きました。南無阿弥陀仏の教えで、どんなふうにも死を超えていくのか、死を受け止めていけるのか、大変大事なことです。そのこともお話できればと思つています。

## ■「南無阿弥陀仏」の意こころ

「南無阿弥陀仏」は、仏さまの方からいただいた、プレゼントされたことばです。このことばが長い歴史を経て現在の私にまで届いているわけですが、今ほどお伝えしたように古代インドの語の音を「南無阿弥陀仏」という漢字に当てたわけですから、漢字からその意味を読みとるのは難しいのです。ところがどの宗派でも「南無阿弥陀仏」と唱えられます。比叡山でも常じょう行堂ぎやうどうと呼ばれる場所で、南無阿弥陀仏が唱えられています。そのように、どの宗派でも南無阿弥陀仏はあるのですが、他宗のような修行の念仏ではなくて、浄土真宗、親鸞しんらん聖人しやうにんが伝えてくださっている念仏は、『大無量寿経だいむりやうじゆきやう（大経だいきやう）』に説かれる四十八の本願ほんがんの

教えに裏打ちされた南無阿弥陀仏です。一言で言えば南無阿弥陀仏だけれども、少し具体的に開いていけば、四十八の本願の教えとして私たちのところに伝わっています。

親鸞聖人が『大無量寿経（大経）』の本願の教えに、からだ身体を貫かれた、その大きな感動の讃歌が「正しょう信しん念ねん仏ぶつ偈げ（正しょう信しん偈げ）」です。その冒頭に「帰き命みょう無む量りょう寿じゆ如にょ来らい 南な無む不ふ可か思し議ぎ光こう」（聖典第二版二二六頁）と叫ばれます。この二句が、本願の教えによって、仏さまの大きな世界に眼を開いた親鸞聖人の感動です。ですからこの二句が南無阿弥陀仏の意味だと言ってもいいと思います。これは音を当てているわけではないので、漢字でその意味が分かるでしょう。「無量」は人間の考えや分別を超えた



量<sup>はか</sup>ることのできない、「寿」はいのちという意味です。ですから親鸞聖人がまず叫ばれたのは、私たちの分別を超えた大きな仏さまの無量のいのちに帰命する、ということなのです。「帰命」は、専門的には難しいので、ここではその意味をとって、大きな仏さまの分別を超えた無量のいのち、南無阿弥陀仏のいのちに目覚め、その命を生き抜いていくとっておきましよう。

### ■私の命、仏さまのいのち

では、命とは何でしょうか。みなさんは、私の命と思っているでしょう。それから命だけではなくて、私の家族、友人、全部私を中心にしか

考えられませんか。生まれた時のことは記憶にないと思いますが、小学校に行く前くらいから記憶があるのではないのでしょうか。それは、人間になってから、つまりことばを覚え、自我が生まれてから記憶として残るからです。そうすると四歳頃から「私」という人間になったと考えていいわけです。親鸞聖人は自我について、具体的には「自力<sup>じりき</sup>」とおっしゃいます。親鸞聖人が自力という時は、自分の力というよりも、自我という意味に近いと思ってください。なぜなら仏教は、基本的に「無我<sup>むが</sup>」を説くからです。

赤ちゃんだった頃の記憶はないかもしれませんが、四歳頃までは自我が生まれていないので、どんなお家に生まれたか、みなさんそれぞれ違